

「超音波診断」第2版

日本超音波医学会 編

自治医科大学教授・臨床病理学

河 合 忠

超音波の医学的応用は、特に診断面において目覚ましい進歩を遂げている。測定装置の改良によって画像が格段に鮮明となったばかりでなく、装置の小型化が進んだ。しかも、多くの臨床研究によって、ほとんどあらゆる組織、臓器への適応が可能になりつつある。それによって、超音波検査はもはや熟練した専門医のみに留まらず、すべての臨床医の日常診療に不可欠な道具となり、文字どおり聴診器並みに広く使用されている。他の画像検査と大きく異なることは、最良の診断結果を得るためには、測定者自身が探触子を自在に動かし on-line で画像を映し出しながら判断しなければならないことである。ということは、単に映し出された画像を判読する能力だけではなく、生体の解剖・生理学的知識と被検者の症状を十分に勘案して探触子进行操作する技術を身につけなければならない。限られた学生実習、初期臨床研修のみではとうてい十分な知

識と技術を身につけることは困難であって、どうしても優れた参考書が必要である。そのような医学界の強い要望を受けて、日本超音波医学会の責任編集の下に誕生したのが本書である。

本書のルーツは、1966年に刊行された「超音波医学—基礎から臨床まで」の初版である。その後、第2版が6年後に刊行されたが、その後の急速な進歩を踏まえ、時代の要請に沿うべく、実に16年後の1988年に新しく刊行されたのが「超音波診断」初版である。今回、6年を経過して、カラードブラ法の記述を充実させ、従来の中樞神経系、眼科、耳鼻科、歯科、体表臓器、循環器、呼吸器、腹部、泌尿器科、産婦人科に、新しく整形外科、皮膚科の領域を追加して第2版が刊行の運びとなった。

本書の特徴は、超音波医学会の総力を挙げて慎重に立案し、しかも編集委員会で内容を検討されて、学会

のコンセンサスを生かすよう努力されたことである。また、付録には“医用超音波用語”、“超音波断層像の表示方法”、“超音波診断基準”を掲載して、この領域での標準化を目指していることも、本書を標準参考書として高く評価できる点であると思う。

超音波検査は医師のほか、医師の指導・監督の下に臨床検査技師により実施されてきたが、本年から法律の改正がなされて診療放射線技師も実施することができるようになった。現在も超音波診断装置の改良が進みつつあり、無侵襲検査の代表的な技術であるだけに、ますます診断面で広範な応用が期待される。現時点での超音波診断についてのバイブルとして、医師、医療関連技術者に利用していただきたい書である。

● B5 992頁 図449 写真1,162
原色図167 1994 定価22,660円
(税込み) 〒600

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)